

## 今帰仁方言のイントネーション

永野マドセン, 泰子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

40

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

41

(発行年 / Year)

2016-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013674>

法政大学沖縄文化研究所「琉球の方言」40号

2016年3月31日発行 抜刷

## 今帰仁方言のイントネーション

永野マドセン泰子

# 今帰仁方言のイントネーション

永野マドセン泰子

## 1. はじめに

本稿は琉球方言のなかでも類型論的に珍しいタイプのピッチアクセントをもつ今帰仁方言のイントネーション分析を試みたものである。日本語や琉球語のように辞書的ピッチアクセントを持つ言語においてはアクセントがイントネーション構造の基盤をなすため、その方言アクセントの音韻論的解釈や音声学的実態についての研究が先行することが望ましい。今帰仁方言については、仲宗根政善氏による『沖縄今帰仁方言』の精緻な記述、そのアクセント表記を詳しく分析したLawrence (1990) や小川 (2009) らの音韻論的解釈の研究、また永野マドセン (2014) によるアクセントの音声学的実態についての研究などがなされてきた。本稿ではこれらの先行研究を踏まえて、さらに上位の韻律レベルであるイントネーション分析を試みるものである。

琉球方言にみるアクセント型は大別して3種類ある。まず、東京方言のように下げ核をもつ方言アクセントがあり、数ではこのタイプが圧倒的多数を占める。代表的なものとして首里方言があげられる。東京方言や大阪方言などにおいては、アクセントの位置は弁別的で予測できないが、首里方言の場合はそれが語頭から2拍目(2拍語では1拍目になる)に固定され非弁別的である。次に、今帰仁方言のように、ピッチの下降ではなく上昇の位置が弁別的とされる方言アクセントがあり、最後に宮古伊良部島にみるような無アクセント方言がある。本稿のイントネーション分析は、先に報告された首里方言および宮古伊良部島のイントネーション分析と同一の理論的枠組みや音響分析を用いたものである(永野マドセン・狩俣2010、永野マドセン2013、Nagano-Madsen 2015)。従って、まだ初歩的ではあるが、琉球語にみる類型論的に異なるタイプのピッチアクセントを持つ方言のイントネーションを比較することが可能となる。

## 2. 調査項目、話者、録音、音響分析

録音項目は、先行研究で報告されている首里方言と宮古伊良部島の無アクセント方言との共通項である「モダリティ」「統語構造(右枝・左枝分かれ)」「情報構造(フォーカス)」である。録音者は今帰仁の西部方言女性話者のMさん(1936年生まれ)であり、本稿では「話者A」と記載される。発話に個別的特徴がある可能性は排除できないが、典型的な単一話者を選んで分析をはじめめる事は、先行研究の少ない方言や言語におけるイントネーション記述によく用いられる手法である。調査は2010年と2012年の夏の2回に分けて、話者の自宅で行われた。まず標準語で作成した調査項目について、当該方言での表現を確認した後、

同文を何度かくり返して発話してもらい録音という手順を取った。本文中の図に引用した発話はその中で最も安定したものを選んだ。録音にあたっては、MicroTrack 24/96デジタルレコーダー、また音響分析にはPRAATおよび杉 SUGI SpeechAnalyzerを用いた。

この話者の他に『今帰仁方言音声データベース』(<http://ryukyu-lang.lib.u-ryukyu.ac.jp/nkjin/index.html>) に収録の男女2人の話者(共に1908年生)の発話についても分析し、計3名の話者についてイントネーションを分析した。方言データベースの話者については「話者B」(男性話者)、「話者C」(女性話者)と記載した。

### 3. イントネーション分析の理論的枠組み

本稿のイントネーション分析にあたっては、Pierrehumbert and Beckman (1988) によって提唱された生成音韻論に基づく東京方言の韻律理論的枠組みを用いた。また一部では、その理論的枠組みから派生したToBIのイントネーションラベリングを用いた。この韻律理論では東京方言について「文節」prosodic word、「アクセント句」accentual phrase (AP)、「中間句」intermediate phrase (iP)、および「発話」utterance (U) という4つの韻律階層を認める。

上記の理論的枠組みでは核を持つ語をaccented、無核語を unaccentedと呼ぶが、本稿では日本人研究者に馴染みの深い有核語・下げ核・下降型および無核語、平板型などの伝統的語彙を用いる。イントネーション分析にあたっては、その主な構成要素であるピッチアクセント、疑問文や命令文などに使われる文末のモダリティ、修飾構造などを含む統語構造、そして談話という単位からみたフォーカスの4項目を中心に分析を試みた。

### 4. 今帰仁方言にみるピッチアクセント

現在までほとんどの研究者が今帰仁方言に3つのアクセント型を提唱している(ただしLawrence1990は複合語に関しては3つでなく2つという立場を取る)。以下は小川(2009:73)の記述に基づくが、このうち2番目が最も無標であり、3番目が最も有標なアクセント型であるとされる。研究者間で一致しているのは、この方言で重要なのはピッチの下がり目ではなく、ピッチの上がり目であるという点で、それは「昇り核」と呼ばれることもある。

- 1) 1モーラ目または2モーラ目から高いピッチになる。
- 2) 3～5モーラ目から高いピッチになる。
- 3) 語頭モーラが高く、直後に義務的下降を伴う。

この3種のピッチアクセントと、首里方言の2種類のピッチアクセントを比較したもの

が図1 a・bであるが、今帰仁方言のアクセントはピッチ領域が狭いことが特徴のひとつである。このうち今帰仁方言の下降型については詳細な音声学的分析の結果、東京方言や首里方言にみる下げ核のアクセントと発話のメカニズムが根本的に異なることが報告されている（永野マドセン 2014）。

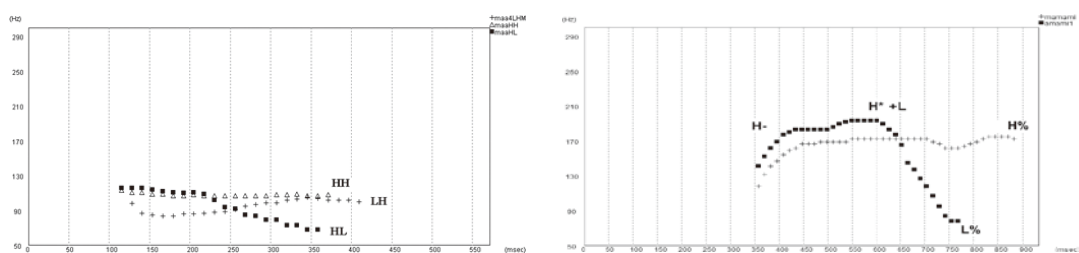


図1 a（向かって左）今帰仁方言にみる三つのアクセント型のピッチパターン・男性話者。  
/ma'a/HL「動作になれて器用であること」、/ma'a/LH「あいだの空間」、/uaa/HH「そこ」。

図1 b（向かって右）首里方言にみる二つのアクセント型のピッチパターン・男性話者。  
/mamami/（平板型H・無核型）「小豆」、アマミ/?ama'mi/（下降型H\*L・有核型）「甘み」。（永野マドセン 2014より）

#### 4.1 ピッチアクセント LH型

ここでは今帰仁方言に最も一般的であるLH型（昇り核とも呼ばれる）のピッチアクセントについて考察する。図2と3は「ミヂー（水）」LHH および「ミヂグラー（貯水池）」LLLHHについて女性と男性話者のピッチ曲線を示したものである。図中の縦線はLの拍とHの拍の境界である。いずれの話者の発話でも、ピッチは境界線の左では低く、右では高くなる。（話者Cの発話では/z/でピッチが下がるが、これは子音の影響なので無視してよい。）話者CではLの連鎖が続く時には順次ピッチの値が下がっていくが、話者Bではほぼ不変である。

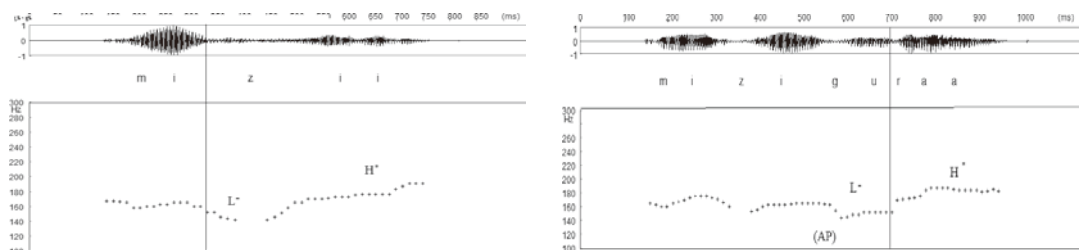


図2 「ミヂー」(水) LHHおよび「ミヂグラー」(貯水池) LLLHHのイントネーション（話者C）図中の縦線はLからHへの拍の境界

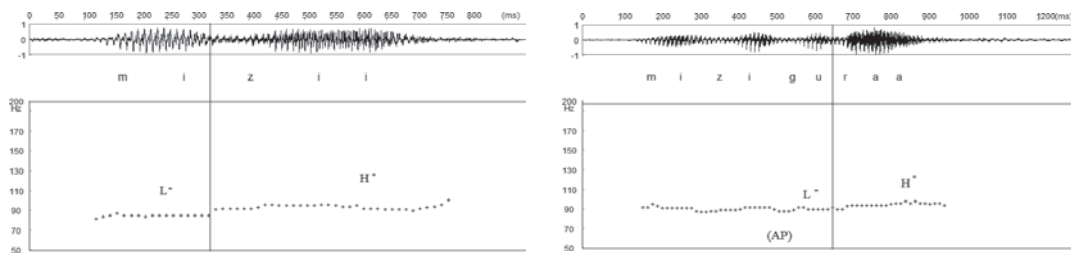


図3 「ミヂー」(水) LHHおよび「ミヂグラ」(貯水池) LLLHHのイントネーション(話者B) 図中の縦線はLからHへの拍の境界

ピッチ形状に基づき、今帰仁方言で最も一般的なLH型のアクセントについて、語頭(句頭)の低ピッチをフレーズトーンL-として、それに続くアクセントをH\*と本稿では表記する。表1には東京方言、今帰仁方言、首里方言、宮古伊良部島方言にみるイントネーション構成要素としてのフレーズトーンおよびピッチアクセントの比較を示した。首里方言では下げ核をもつアクセントH\*+Lでも平板型でも、語頭に規則的なピッチの上昇(フレーズトーンH-)が見られ、それは平板型よりも下げ核のアクセントの場合により高くなる(図1b参照)。これは東京方言のアクセントの音声学的特徴と全く同じである。興味深いことに、無アクセント方言である宮古伊良部島方言でも、アクセントはないものの句頭に規則的なピッチの上昇が観察され、フレーズトーンH-として記述されている(永野マドセン2013)。しかし、今帰仁方言では昇り核アクセント(図中H\*)に先行してゆるやかなピッチの「下降」が規則的にみられることが多いので、フレーズトーンとしてL-を提唱しているわけである。アクセントとしてL\*+HではなくH\*を提唱するのは、「次を上げる働き」ではなく「そこで上がる働き」というUwano(2012)の解釈をしているためである。

表1 今帰仁方言、首里方言、宮古伊良部島方言および東京方言にみるフレーズトーンとピッチアクセントの比較。

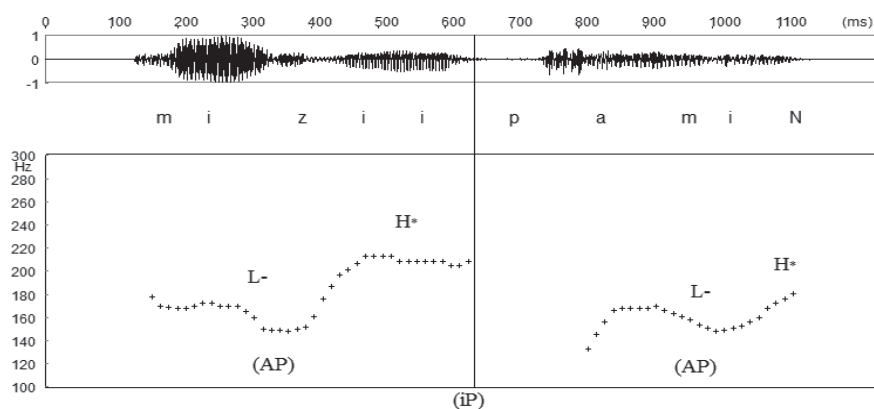
方言	フレーズトーン	アクセント	出現
今帰仁	L-	H* (有核・上昇)	
	H-	H*+L (有核?・下降)	限定的
	-	H (無核・平板)	限定的
首里	H-	H*+L (有核・下降)	
	H-	H (無核・平板)	
宮古伊良部	H-	無アクセント	
東京	H-	H*+L (有核・下降)	
	H-	H (無核・平板)	

## 5. 今帰仁方言にみるアクセント句 (AP) と中間句 (iP)

次にピッチアクセントを担う語や文節の連続がどのように上位韻律単位であるアクセント句や中間句を形成するのか、この方言で最も一般的な昇り核アクセントを持つ語を中心に見てみたい。

### 5.1 LH+LH

まず最も頻度の多いLHの文節が連続する場合について「ミヂー・パミン」(水っぽくなる) LHH・LHH および「ミヂー イヂルン」(水が出る) LHH・LLHHのイントネーションを図4に示した。いずれの発話でも、後続の文節のLとHにおけるピッチ値は先行のLとHより低く、ダウンステップが生じていることが観察される。LH型のアクセントをもつ文節は低いピッチLではじまり、このLをもって今帰仁方言にみるアクセント句 (AP) の境界と考えることができる。ここでの例では、二つのアクセント句がさらに上位の韻律単位である中間句 (iP) を構成している。つまりダウンステップの範囲は東京方言や首里方言と同じく中間句である。



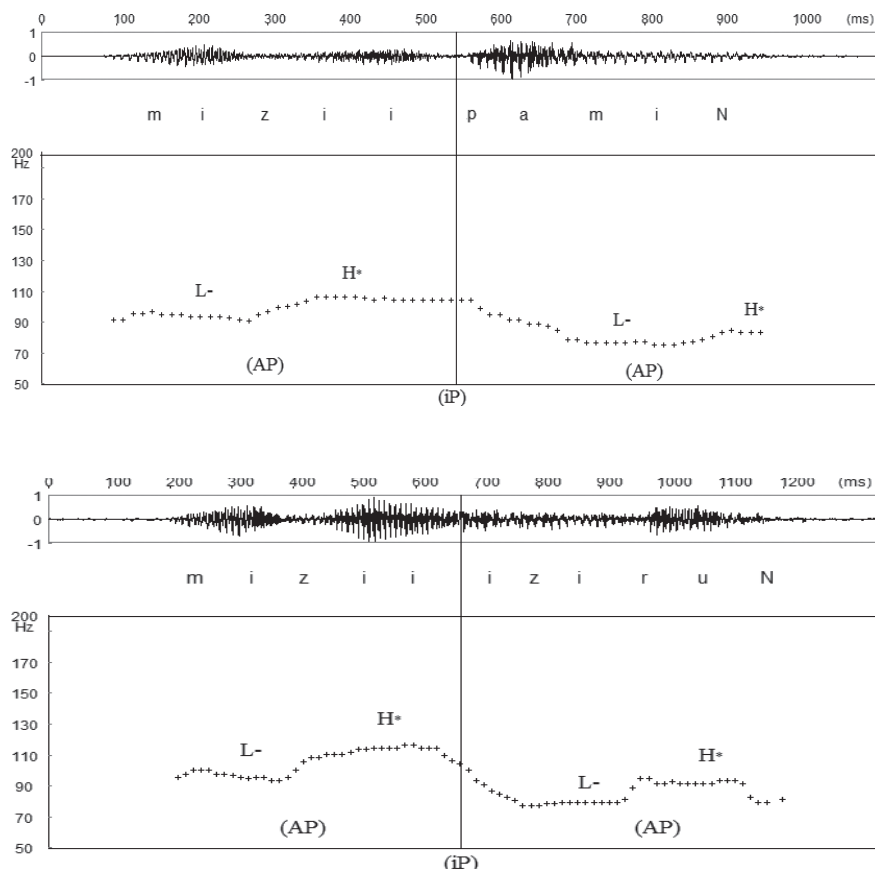


図4 「ミヂー・パミン」(水っぽくなる) LHH・LHH (上・話者C、中・話者B) および「ミヂーいヂルン」(水が出る) LHH・LLHH (話者B) のイントネーション)  
 図中の縦線は文節の境界

ここで理論的に注目すべきは、今帰仁方言のダウンステップが語(文節)頭のL-によって引き起こされている点である。東京方言をはじめとする多くの本土方言で、また首里方言においてもダウンステップは下げ核H\*+L-によって起こるとされている。また、昇り核を持つとされる五所川原方言ではアクセントのHと句末のL%トーンというHLの連続によってダウンステップがおこると説明されている(Igarashi 2007)。しかし、今帰仁方言では後続の語頭のL-のみによって引き起こされると解釈できるのではないかと。今帰仁方言においては、Hで終わる文節が多いため後続のL-が続くとHL-という連続になることが多い。しかし、頻度としては少ないが、先行の語がHL%である場合でも、後続のL-はそこからさらに下がるためダウンステップが発生する。従って、文節頭のL-のみによるダウンステップと解釈するほうが妥当と考える(5.3を参照)。



## 5.2 LH+HL

次に、LHの語にHLの文節が続く場合を図xに見てみよう。「ミヂーソーリン(水がひく)」LHH・HHHLのイントネーションを図5に示す。ここには先行の文節と後続の文節がそれぞれHであり、Hが融合していることが見てとれる(図中の矢印①は文節の境界)。この組み合わせではダウンステップは生じない。ちなみに話者Cの発話では、文末の「ン」にはっきりとしたピッチの下降が観察されるが、話者Bの発話ではそれが無い。

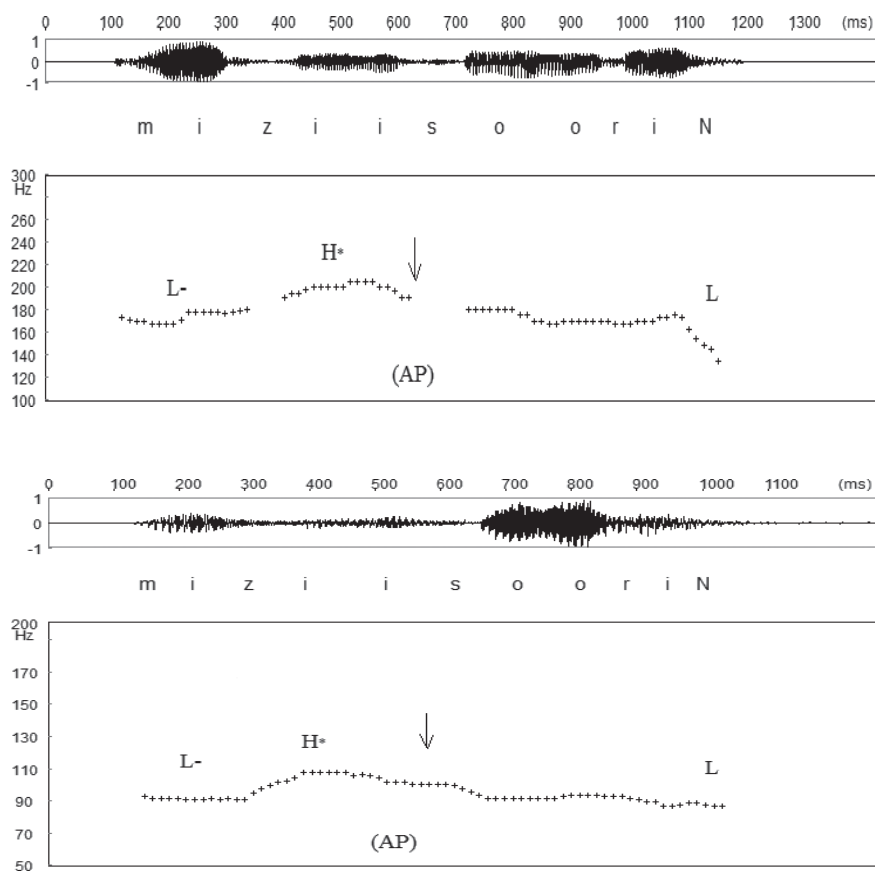


図5 「ミヂーソーリン(水がひく)」LHH・HHHLのイントネーション(上・話者C、下・話者B) 図中の縦線は文節の境界

### 5.3 HL+LH

伝統的な語彙の場合には、HLの語は少ないが組み合わせとして「ジローガユミバ（次郎が読めば）」のピッチ曲線を示した。図中の縦線は文節の境界である。「ユミバ（読めば）」の文節頭のL-はH\*の直前では先行のL%のピッチ値よりわずかに下がっていることに注意。

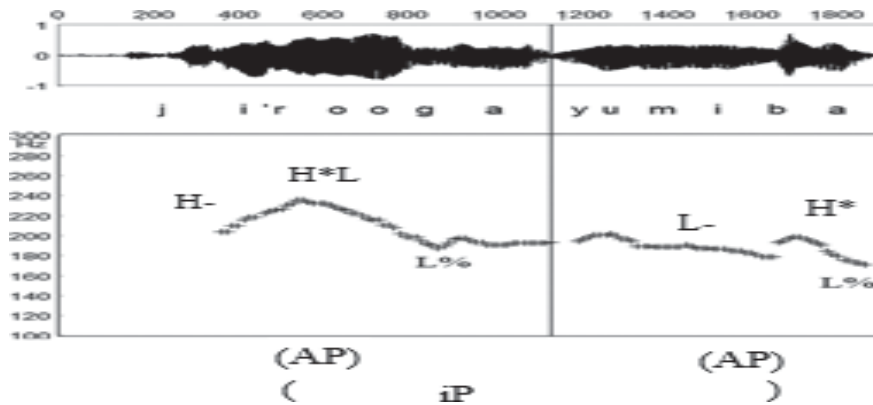


図6 「ジローガ ユミバ（次郎が読めば）」 LHHL・LLHのイントネーション（話者A）

## 6. 文末のモダリティ

ここでいう「モダリティ」とは「叙述、疑問、意思、行為要求」などを下位区分にもつ「表現類型のモダリティ」（日本語記述文法研究会編 2003）を指す。今帰仁方言にあらわれる「叙述」「疑問」「命令」「勧誘」「同意」について順次、文末表現とそのイントネーションをみてゆく。助詞「ガ」および「ヤ（は）」は通常、先行の名詞に低く付くが、図9「マナミヤー ヒケー（真奈美は行け）」の文では「ヤ」は句末の卓立イントネーションとしてHトーンH%でしかも「ヤー」と長く発話されており、「真奈美」にフォーカスが当てられた発話となっている。図10および11が共に文末が終助詞「ヤー（ね）」で終わっているが、図10の「勧誘」では文末のピッチは下降調、図11の「同意」では上昇調で発話されている。これらの例文で観察されるように、モダリティは中間句（iP）の右端に現れ、「同意」や「確認」以外はピッチの下降を伴って発話されている。なお疑問詞疑問文については7節で扱う。

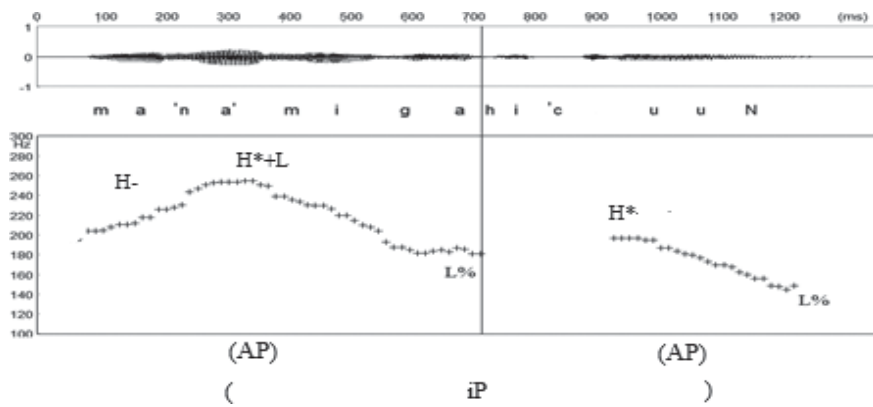


図7 「マナミガ ヒチュン (真奈美が行く)」(叙述)

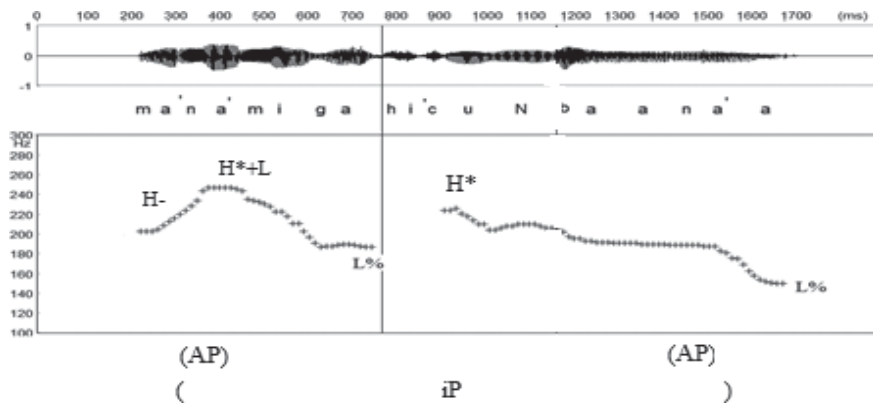


図8 「マナミガ ヒチュンバーナー (真奈美が行くことになっているのか)」(疑問)

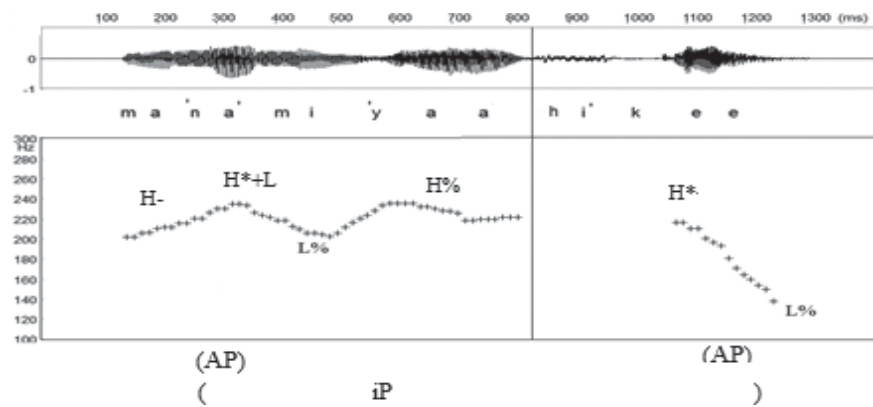


図9 「マナミヤー ヒケー (真奈美は行け)」(命令) (話者A)

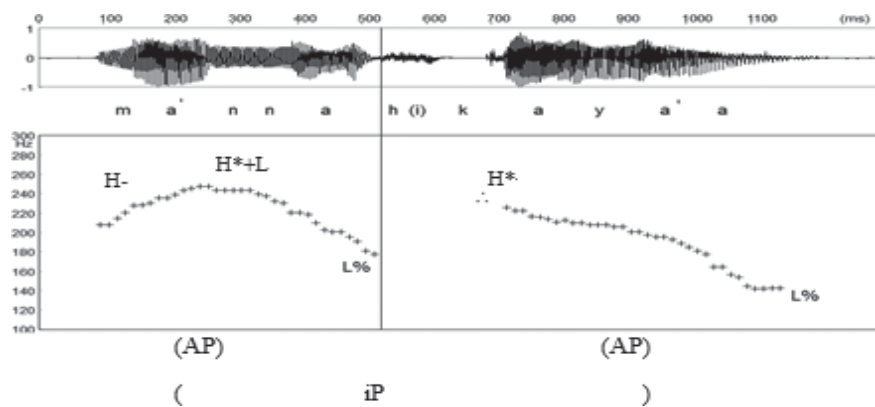


図10 「マン ナー ヒ カーヤー (一緒に行こうよ)」(勧誘) (話者A)

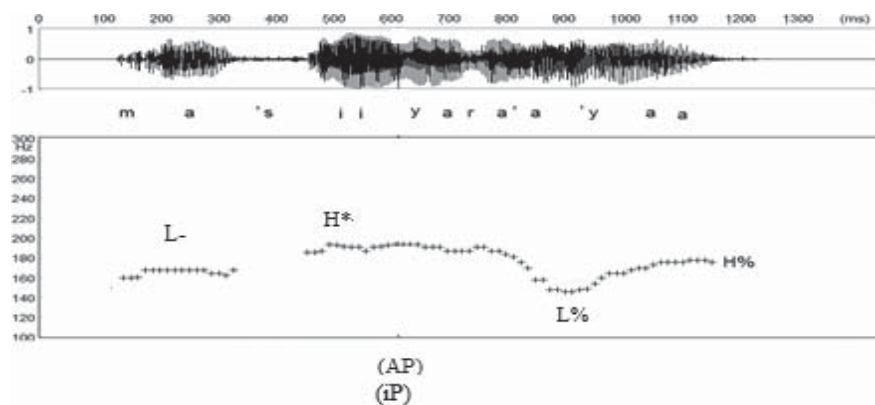


図11 「マシー ヤラー ヤー (いいでしょうね)」(同意) 文末の「ヤー」は本土方言の「ね」に相当する。(話者C)

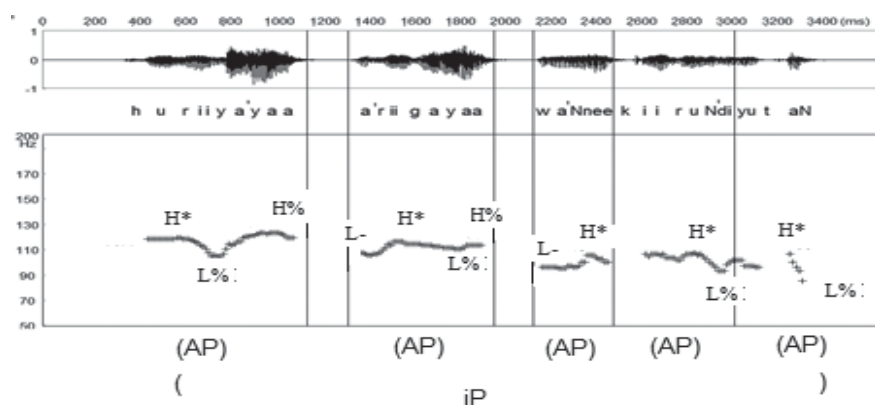


図12 「フリー ヤー アリーガ ヤー ワンネー キールンディ ユーたん (これはね、彼がね、わたしにしてくれると言っていた)」(確認) (話者B)

## 7. 疑問詞疑問文

「ディル (どれ)」HL「ヌー (何)」HL「ダー (どこ)」HL「タルー (誰)」LHHなどの疑問詞を含む文では、文末の法接尾辞「ガ」で対応するがこれは首里方言と同じである。今帰仁方言の疑問詞はほぼすべてピッチの下降を伴うHL型であり、ピッチの上昇を伴う「タルー (誰)」LHHも助詞「が」は低く付くので、ピッチの下降が生じる。ここでは疑問詞にLH, HLそれぞれの型のアクセントを持つ文節が連続した場合のイントネーションを考察する。

### 7.1 HL+HL

「ヌー ドゥー ガ (何と言うか)」HL・HHL この発話では後続のHHLから予測されるピッチの下降は観察されず、東京方言や首里方言にみるように疑問詞に続くHLが弱化(この例では完全消滅)している。しかし「フリー ヤー ヌーガ (これは何か)」LHHL・HLLと疑問詞が後続の文ではいずれのHLも実現されており、後続のHLの弱化はみられない。これは「何」という疑問詞がこの文の焦点であるため、意味的にピッチの弱化が不適切であるためと考えられる。

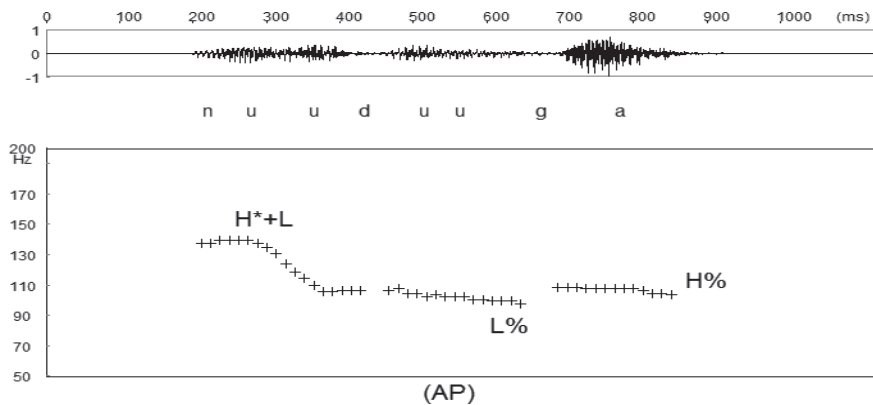


図13 「ヌー ドゥー ガ (何と言うか)」HL・HHL (話者B)

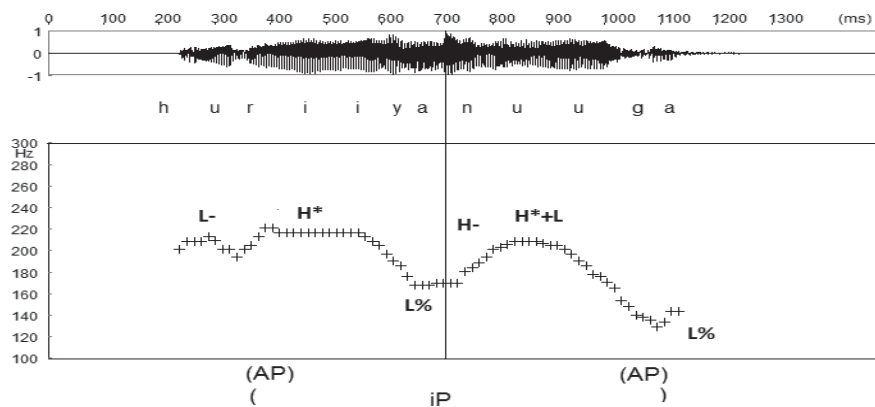


図14 「フリーヤヌーガ (これは何か)」 LHHL HLL (話者C)

## 7.2 LHL+LH・LHL

次にHL型の疑問詞にLH型あるいはHL型の文節が連続する場合のイントネーションを以下に示した。「ディル マシーガ (どれがよいか)」HL・LHHHでは「ディル」と「マシーガ」の境界は融合しているが、「ディル」のLのあと、後続の「マ」のLでさらにピッチは下がるため、「マシーガ」が独立のアクセント句として発話され、文末はHで終わる。次の「タルーガ ヒチューガ (誰が行くの)」の疑問詞「タルー」はLHHであるが、助詞の「が」が低くつくため、ここではLHL型として扱っている。この文では後続の文節がもともと「ヒチューン (行く)」LHLであるため、HL型が続くことになる。この文でも同様に後続の「行くの」が独立のアクセント句として発話され、ダウンステップを起こしている。

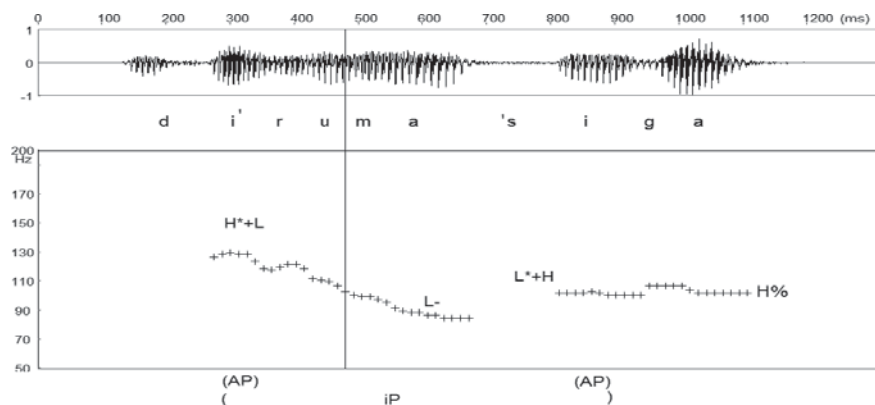


図15 「ディル マシーガ (どれがよいか)」 HL・LHHH。(話者B)

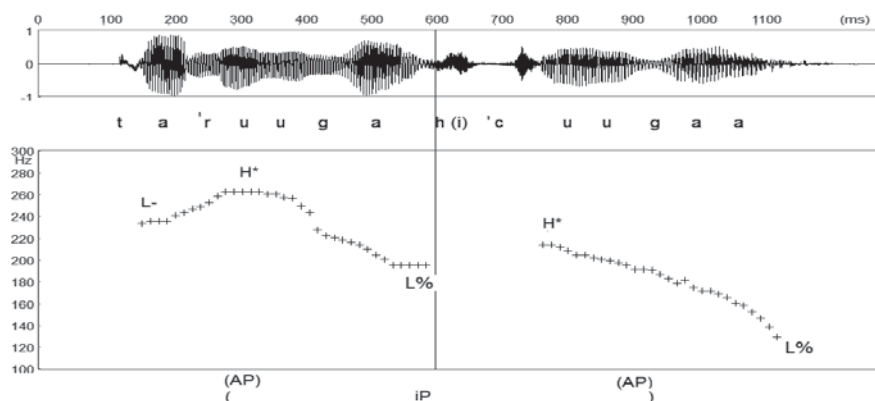


図16 「タルーガ ヒチューガ (誰が行くの)」(話者A)

## 8. 統語構造 (左枝分かれと右枝分かれ)

構文構造や修飾構造を反映するイントネーションについては、「左枝分かれ、右枝分かれの構文」の違いとして、東京方言をはじめとして広く調査研究されている。ここでは「次郎が読むと眠たくなる」と「次郎は飲むと眠たくなる」の違い、「青い屋根の家が見える」と「青い小さな家が見える」の違いを考察する。このような修飾構造の違いが本土方言の先行研究においてイントネーションに規則的に反映される事が知られており、琉球方言についても首里方言と伊良部島方言において同様の傾向が報告されている。(永野マドセン・狩俣 2010、永野マドセン 2013)

### 8.1 「次郎は飲むと眠たくなる」と「次郎が読むと眠たくなる」

この両文は以下のように、左枝分かれと右枝分かれの統語構造を持つ。

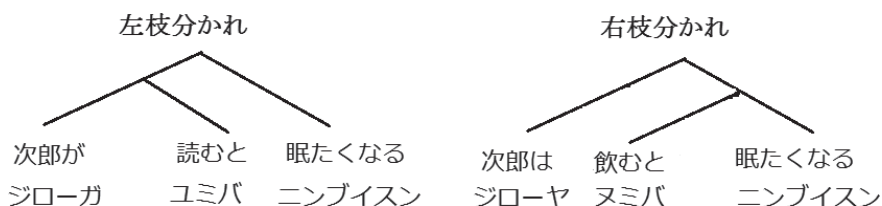


図17、18は「ジローガ ユミバ ニンブイسن (次郎が読むと眠たくなる)」と「ジローヤ ヌミバ ニンブイسن (次郎は飲むと眠たくなる)」のイントネーションを比較したものであるが、まず観察されるのが、比較的長いポーズの位置が両発話で異なることである。ポーズは「次郎が読むと」と「次郎は」の後に置かれ、それぞれ左枝分れ、右枝分かれの統語構造の差異を反映しており、この方言においてポーズが韻律構造に重要な役割を

果たすことが示唆されている。本土方言や首里方言では、右枝分かれ構造を持つ語ではピッチの上昇（リセット）が観察されるが、この文ではほとんど観察されない。

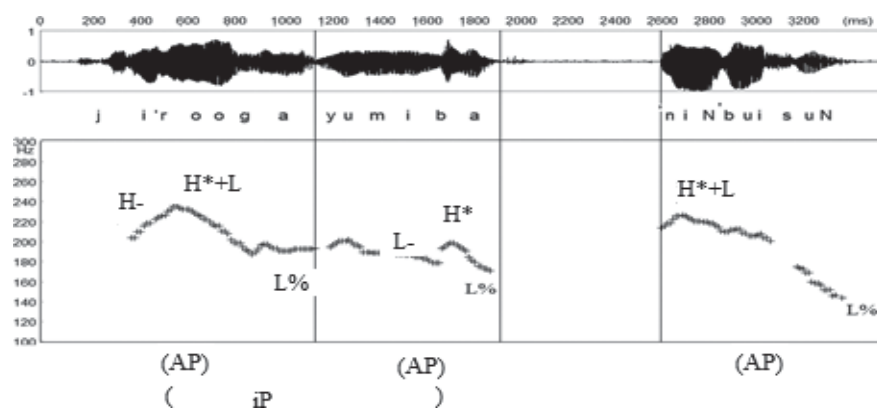


図17 「ジローガ ユミバ ニンブイスン (次郎が読むと眠たくなる)」のイントネーション。(話者A)

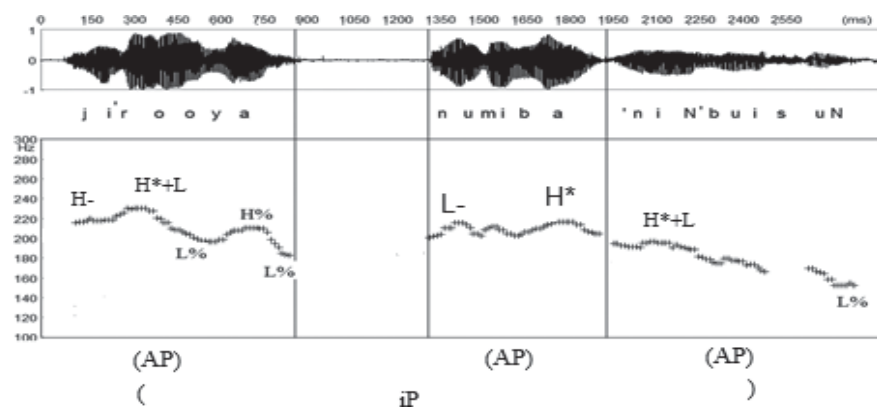
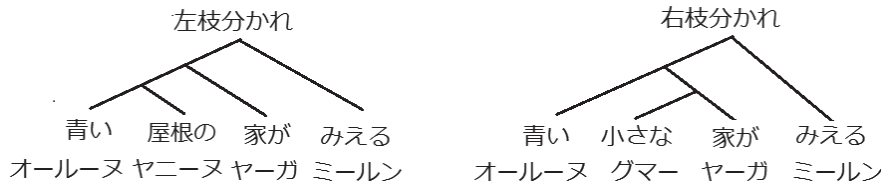


図18 「ジローヤ スミバ ニンブイスン (次郎は飲むと眠たくなる)」のイントネーション (話者A)

## 8.2 「青い屋根の家が見える」と「青い小さな家が見える」

この両文は左枝分かれ構造のみからなる「オールヌ ヤニーヌ ヤーガ ミールン (青い屋根の家が見える)」と名詞句のなかに右枝分かれを含む「オールヌ グマー ヤーガ ミールン (青い小さな家が見える)」という異なる統語構造をもつ。両文のイントネーションを図19, 20に示す。





左枝分れのみからなる「オールーヌ ヤニーヌ ヤーガ ミールン (青い屋根の家が見える)」と右枝分れを含む「オールーヌ グマーヤーガ ミールン (青い小さな家が見える)」(注：ただし話者は「グマヤー」と複合語として発話)を比較すると、前者では文全体がポーズなしで発話されているが、後者では「オールーヌ (青い)」のあとに長いポーズが置かれおり、右枝分かれ構造を反映している。ピッチの値だけを見ると、いずれの文においてもアクセント句のピッチ値は次第に低くなっている。またいずれの文においても、アクセント句のほとんどが卓立のイントネーションH%で終わっている。東京方言や首里方言では、右枝分かれの統語構造では通常ピッチのリセットが起こり (Kubozono 1988)、イントネーション単位の数が増えるが、この例でも今帰仁方言は右枝分れ構造でピッチのリセットが行われな。統語構造の差異がイントネーションよりもポーズで規則的に区別される点で、またアクセント句の多くが卓立のイントネーションで終わっている点で、今帰仁方言は首里方言よりも宮古伊良部島方言のイントネーションの特徴に似ている。

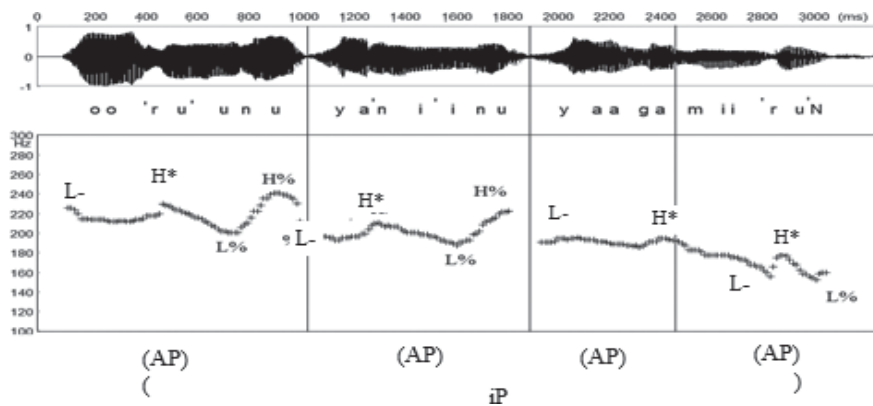


図19 左枝分かれ構文「オールーヌ ヤニーヌ ヤーガ ミールン (青い屋根の家が見える)」のイントネーション。(話者A)

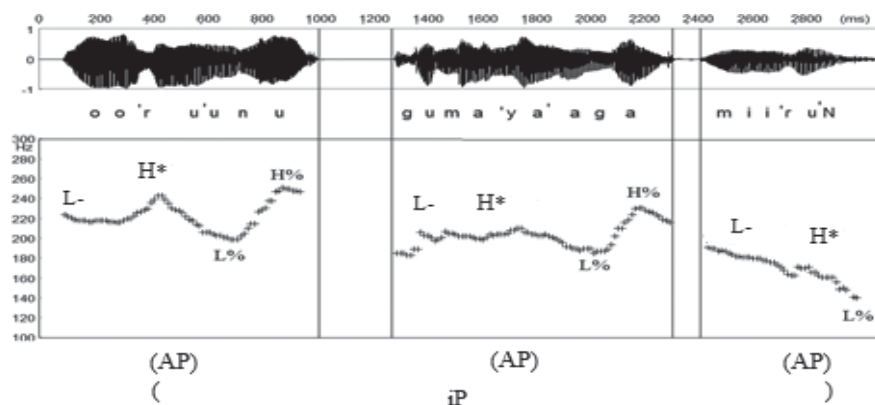


図20 右枝分かれを名詞句の中を含む「オールヌ グマヤーガ ミールン（青い小さな家が見えるのイントネーション。（話者A）

## 9. フォーカス

文のイントネーションを規定する要因のひとつとして、フォーカスがある事は先行研究によりよく知られている。フォーカス構文におけるイントネーションの特徴として、フォーカスの置かれる語や句のピッチが高められ、その前後のピッチは低く抑えられるイントネーション形状が日本語のみならず諸言語で観察されている。フォーカスと関連して琉球方言に特異なものとして「係り結び」に似た文法形態がみられる。しかし「係り結び」の本質を焦点化とみることについては異論もある（狩俣 2011）。この節では首里方言、宮古伊良部島方言との比較も交えつつ、琉球方言で一般的な係助詞「ル（ドゥ）」および今帰仁方言に特異な係助詞「クセー（こそ）」を含むフォーカス文のイントネーションについて考察する。

### 9.1 係助詞「ル」

まずはじめに「マナミヤ バスシ ナハチ ヒチュタン（真奈美はバスで那覇へ行きよった）」という中立文を基本に、「真奈美は那覇へ何で行ったの？」「真奈美はバスでどこへ行ったの？」という問いに対して得られた発話を分析した。それぞれ「バスシル（バスで）」「ナハチル（那覇へ）」に係助詞「ル」が付加され、文末も中立叙述文の「ン」から「ル」に変化する一般的なフォーカス疑問に加えて、同様の発話を係助詞なしのバージョンでも録音し比較した。係助詞「ル」の付加した発話と、係助詞なしの発話を比較すると、「バスで」の発話では、係助詞の付かない発話で「バスで」のあとに長いポーズが置かれているが、「ル」の付加した発話ではポーズはない。なお、「バスで」はいずれの発話でも、フォーカスの置かれた語は係助詞の付加にかかわらず、文中で最も高いピッチで発話される。「バスで」の発話では、係助詞のみが卓立のピッチで発話されている。そしてフォーカスのお

かれた語の前後のピッチは抑えられることが多い。係助詞「ル」の付加した発話と係助詞なしの発話の特徴に際立った違いは観察されない。

また、話者間の比較のため、データベースの発話から「ディル ヨーカ ン フ リー ガル タカー セール ナー (どれよりもこれが高いよ)」のイントネーションも示した。ここでは「ル」はHLの後に低くついている。首里方言と宮古伊良部島方言では、首里では係助詞「ル」が定期的に低く付き、卓立のイントネーションで発話される例が観察されなかった。対して宮古伊良部島では、フォーカス実現の係助詞は卓立イントネーションとして文中で最も高いピッチ値として定期的に発話される事が観察されている(永野マドセン 2013)。今帰仁方言では、「真奈美」の文に見られるように、低く付くことが多いが同一話者でも卓立のイントネーションとして高く付く例も観察されている(例えば図25)。図25の発話では、フォーカスの置かれた「ナハチル(那覇へ)」のピッチ値が低いため、句末の「ル」がそれを補う意図で高いピッチで発話されていると考えられる。

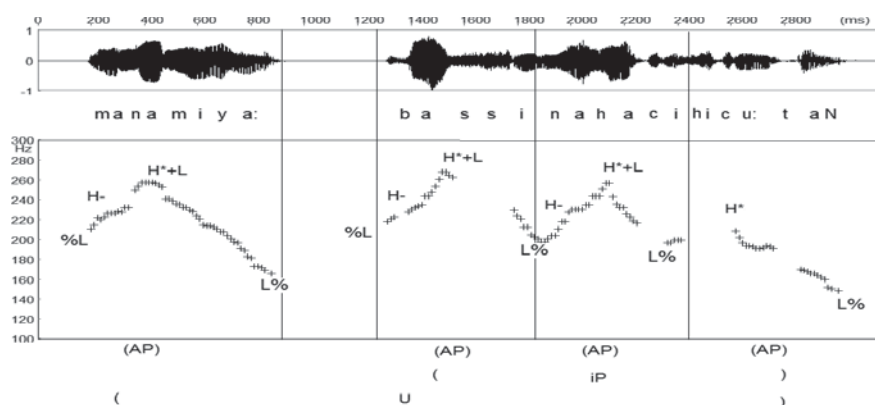


図21 「マナミヤ バスシ ナハチ ヒチュータン (真奈美はバスで那覇へ行きよった)」  
(中立) (話者A)

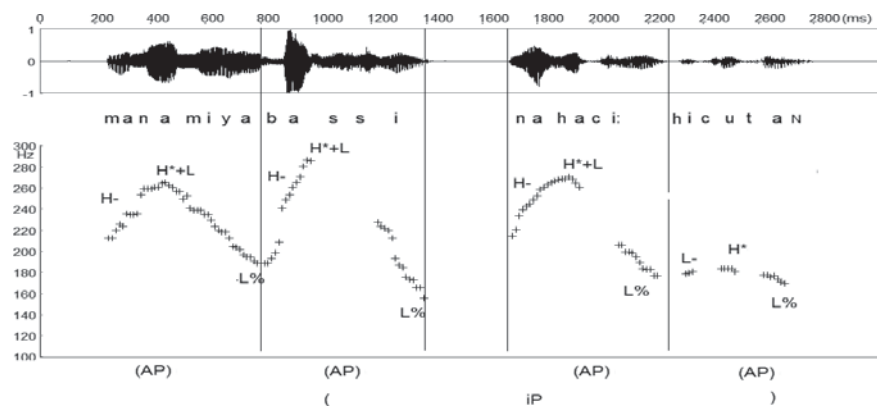


図22 「バスシ (バスで)」にフォーカス (係助詞なし) (話者A)

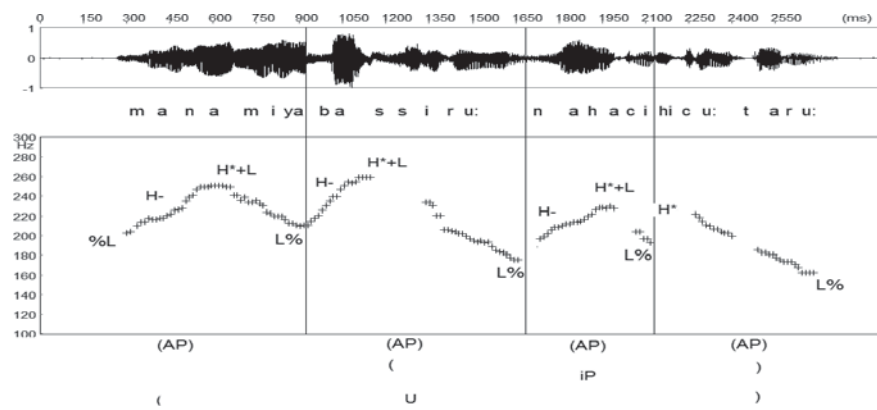


図23 「バスシル (バスで)」にフォーカス (係助詞「ル」が付加) (話者A)

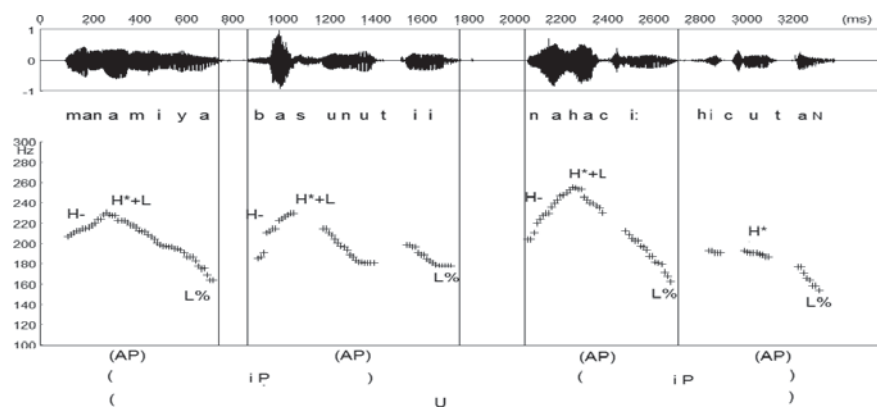


図24 「ナハチ (那覇へ)」にフォーカス (係助詞なし) (話者A)

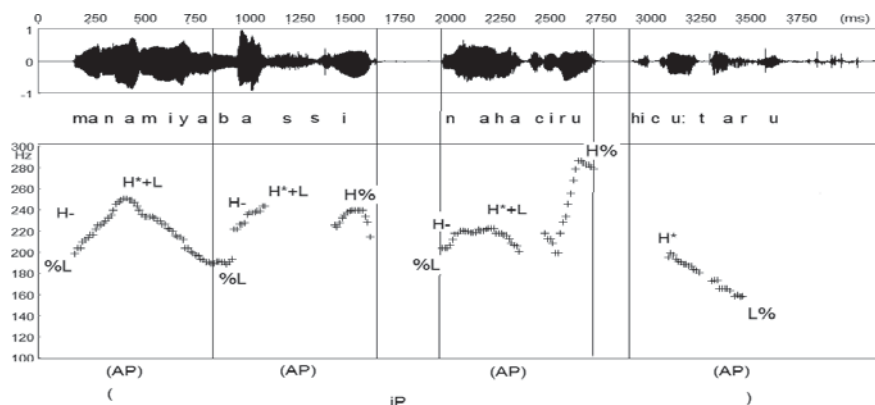


図25 「ナハチル (那覇へ)」にフォーカス (係助詞「ル」が付加) (話者A)

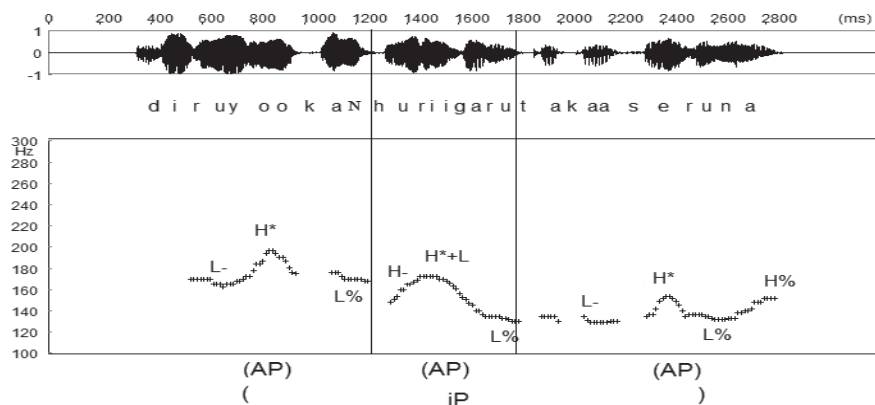


図26 「ディル ヨーカ ンフリーガル タカーセー ル ナー (どれよりも これが高いよ)」 (係助詞「ル」が付加) (話者C)

## 9.2 係助詞「クセー」

係助詞「クセー」今帰仁方言には、強く指示して強調する意をあらわす「クセー」(こそ)という係助詞がある(末尾は「ラ」)。単独発話(図27参照)ではゆるやかな下降を伴う。「アリーガクセー イヂャーラ(彼こそ行ったにちがいない)」および「フリクセー エーラ(これにちがいない)」のイントネーションを図28, 29に示した。「クセー」は単独発話では男女両話者に下降が観察されるが、文中における発話では、男性話者の「クセー」に下降がほとんど観察されない。「クセー」の付加したフォーカス文では、通常のフォーカス文にみるようなピッチの差異、つまりフォーカスのある語のピッチが高く、その前後は抑えられる、という現象がみられない。これは話者間の差異であるのか、この係助詞に特有の現象であるのかは不明である。

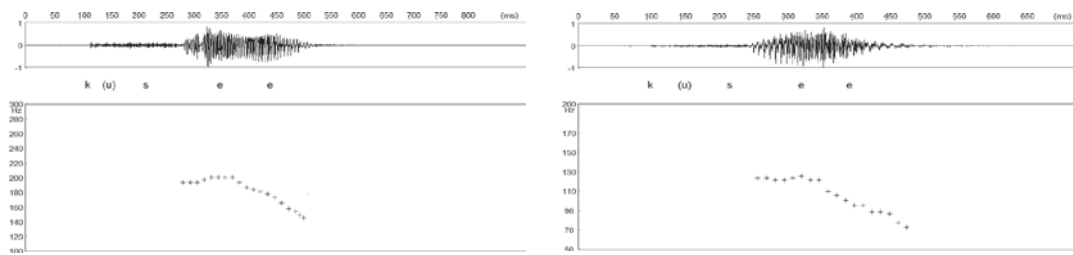


図27 「クセー」の単独発話。左女性話者C、右、男性話者B

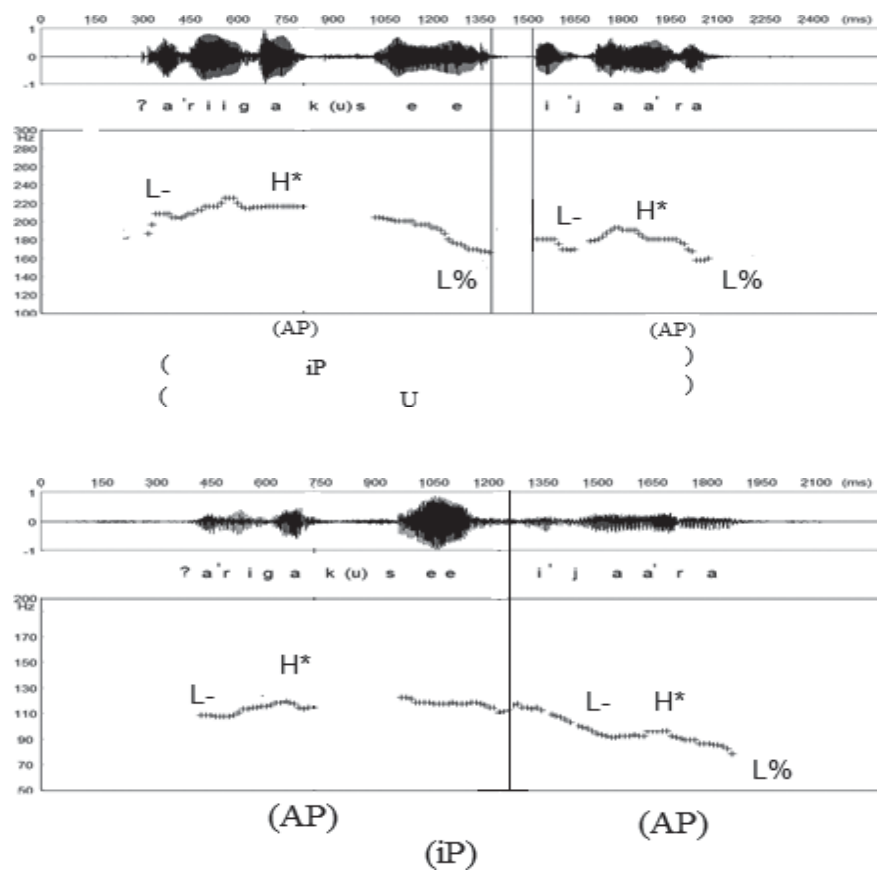


図28 「アリーガクセー イチャーラ (彼こそ行ったにちがいない)」(上・話者C、下・話者B)

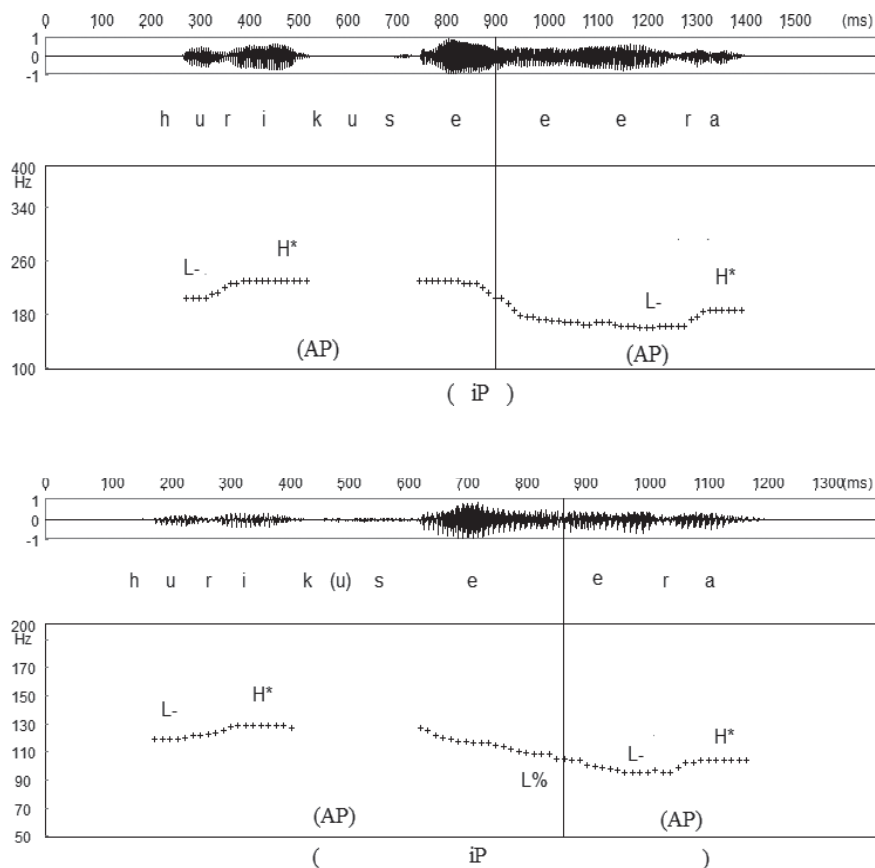


図29 「フリクセーエーラ (これにちがいない)」(上・話者C, 下・話者B)

## 10. 終わりに

初歩的ではあるが、琉球語のみならず、日本語のなかでも特殊なアクセント型を持つ今帰仁方言のイントネーション分析を試みた。この方言でも、モダリティ、統語構造、フォーカスなどの情報が規則的に韻律構造に反映されている事が明らかにされた。今帰仁方言のイントネーションは三つのピッチアクセント型を基盤とする文節、その上位韻律構造であるアクセント句 (AP) および中間句 (iP) さらにその上に発話 (U) という構造を持つ。モダリティはイントネーション句の右端に現れ、同意や確認以外はピッチの下降を伴う。左枝、右枝分かれの統語構造はピッチよりポーズで規則的に示される傾向にある。

フォーカスは首里方言などと同様に、語・句末に係助詞「ル」が付加され、それに伴い文末の動詞の活用形が変化する。係助詞の有無を変化させた発話では、どちらにもフォーカスの置かれる句のピッチ領域の拡大とそれ以外の句のピッチの縮小が観察された。しかしこの方言特有の係助詞「クセー (こそ)」含む発話では、そのようなピッチ領域の変化が観察されなかった。係助詞「ル (ドゥ)」は首里方言では通常低く付き、無アクセント

方言である宮古伊良部島方言では卓立のイントネーションとして高く付くことが先行研究で報告されている。今帰仁方言では低く付くことが多いものの、一部、卓立のイントネーションとして高く付く例もみられた。今帰仁方言のイントネーションは統語構造の違いにイントネーションよりもポーズを規則的に使う点で、また、句末に卓立のイントネーションが一部現れる点で、首里よりも宮古伊良部島方言に似ているといえる。また基本となるピッチアクセントが上昇型であるため、全般にピッチの幅が狭いという点においても首里よりは伊良部島方言に似ている。

今帰仁方言のイントネーション研究で今後あきらかにすべきは、ピッチアクセントの音韻論的解釈を含めた研究であろう。本稿で新たに得られた知見で最も興味深いのは、LH（昇り核）といわれるこの方言に規則的に観察されるダウンステップが文節頭のL-のみによって引き起こされるという点で、従来いわれてきたHLの連続を必要としない事にある。東京方言ではダウンステップは下げ核をもつ語の連続HLHLにおいてのみ観察され、昇り核を持つとされる五所川原方言のダウンステップでもアクセントHと句末のLトーンとのHLの連続によって起こると解釈されている（Igarashi 2007）。ダウンステップに関しては、首里方言ではいわゆる平板型の連続でもダウンステップが起こることが、50年代より観察されているが（詳細は永野マドセン・狩俣2009参照）これは韻律の類型論的にも大変珍しい。琉球語のイントネーションについて今後さらなる研究が望まれる。

## 謝辞

詳細なコメントおよび訂正箇所を御指摘くださった査読者に厚くお礼申し上げます。

## 参考文献

- 小川晋史（2009）『今帰仁方言のアクセント体系』博士論文。神戸大学。
- 狩俣繁久（2011）「琉球方言の焦点化助辞と文の通達的なタイプ」『日本語の研究』
- 永野マドセン泰子・狩俣繁久（2009）「首里方言アクセントの音声学的実態」『琉球の方言』33号65-86, 法政大学沖縄文化研究所
- 永野マドセン泰子・狩俣繁久（2010）「首里方言のイントネーション」『琉球の方言』34:175-191. 法政大学沖縄文化研究所
- 永野マドセン泰子（2013）「南琉球・宮古伊良部島方言にみる無アクセント方言のイントネーション」『琉球の方言』37号25-44, 法政大学沖縄文化研究所
- 永野マドセン泰子（2014）「今帰仁方言アクセントの音声分析」『琉球の方言』38号51-68, 法政大学沖縄文化研究所
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版
- Igarashi, Yosuke. (2007). 'Pitch pattern alternation in Goshogawara Japanese: Evidence



- for a prosodic phrase above the domain for downstep', *Proceedings of the Interspeech 2007*. Antwerp, Belgium, 434-437.
- Kubozono, Haruo. 1988. *The Organization of Japanese Prosody*. PH.D. dissertation, Edinburgh University.
- Lawrence, Wayne P. (1990). Nakijin Phonology: Feet and extrametricality in a Japanese dialect. 筑波大学未刊博士論文.
- Nagano-Madsen, Yasuko. (2015) Intonation in Okinawan (chapter). Handbook of the Ryukyuan Languages. Berlin: De Gruyter Mouton. (章・沖縄語のイントネーション)
- Pierrehumbert, Janet and Mary E. Beckman (1988) *Japanese tone structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Uwano, Zendo. 2012. Three types of accent kernels in Japanese. *Lingua* vol.122 : 1415–1440.